

汽水湖沿岸の漁撈と生活研究のための覚書

松 田 睦 彦

MATSUDA Mutsuhiko

はじめに

小稿は汽水湖という環境とそこで展開してきた多様な漁法との関係を整理し、今後、汽水湖沿岸で営まれてきた漁業と、それを含み込んだ生業の複合性について考察するための予備的作業である。

本共同研究が実施されたこの3年間で、高知県の四万十川河口域、島根県と鳥取県にまたがる中海、そして淀川河口域を含む大阪湾といった地域を調査する機会を与えられた。筆者にとっては汽水湖という環境と人の生活との関係について考える初めての機会であったが、地理的環境やその影響を受けた生態系が人間生活に及ぼす力の大きさを改めて感じさせられるものであった。

さて、汽水域をめぐって地元の方にお話をうかがうなかで最も印象深く感じられたのは、汽水域で行われてきた漁法の多様性である。たとえば四万十川河口域では、現在盛んに行われているアオサの養殖やそれに先立って行われていた天然のアオサやスジアオノリの採取のほか、アユの地曳網漁や投網漁・火振り漁、ウナギの延縄漁やコロバシ漁（筌漁）・ヒゴツリ・シバヅケ漁、カニカゴを使ったツガニ（モクズガニ）漁、ゴリのノボリオトシ漁・ガラビキ漁、テナガエビのタモ網漁・シバヅケ漁、水中灯を用いたシラスウナギ漁、さまざまな魚種が獲れるイシグロ漁など多様な漁が行われてきた。そして、ここで注目したいのは、一つの魚種に対してさまざまな漁法が試みられているということであり、それらの漁法が簡素で、一人の漁師が複数の漁法に関わってきたということである。

一般的に現在海で行われる漁については、一つの地域で採用される漁法は限られており、機械化や網などの漁具の大型化が進展している印象を受ける。また、それがゆえに一人の漁師が営む漁の種類はそれほど多くはない。もちろん、すべての地域の漁業が当てはまるわけではない。ただ、たとえば筆者が調査を行っている愛媛県今治市宮窪町では古くからマダイ漁が盛んだが、その漁法は一本釣りのほか、マスダテ網やゴチ網に限られている。その他には多魚種を狙う底曳網やエビを狙うエビ漕ぎ（エビ底曳網）、貝類やナマコを狙う潜水漁などが見られるが、一つの魚種に対する漁法の多様性には乏しい。また、機械化の進展はめざましく、漁船の動力化や網の巻揚げ機は当然のこと、伝統的に見える一本釣りでさえもGPSや魚群探知機が活用されることがある。

それに対して四万十川河口域の漁はアユに対してもウナギに対しても多様な漁法が展開する⁽¹⁾が、以下、小稿で取り上げる中海についても同様の傾向が見られ、ここに漁場としての汽水域の特徴が表れていると考えられる。

こうした傾向の当否については、漁撈主体の規模や生計上の漁業への依存度、機械化の度合いな

ど、さまざまな要素を詳細に検討したうえで判断されるべきであろう。ただ、ここで一つ注目しておきたいのは、上記のさまざまな要素の背景には汽水域という環境要因が重要な位置を占めているということであり、当然のことながら中海についても汽水湖という環境が漁撈活動や生計活動全般に与える影響には計り知れないものがあることが予想されるということである。

そこで、以下では汽水湖という環境が漁業に与える影響について、これまでの民俗学的成果を生態学の成果をふまえながら整理し、今後、汽水湖で営まれてきた漁業とそれにたずさわってきた人びとの生活を明らかにするための予備的作業としたい。

汽水湖の環境的特徴と中海

汽水湖とは「海の一部が沿岸洲等によって閉鎖的水域になったものであり、多くの沿岸潟湖がこれに含まれる」という。その一般的な環境的特徴については生態学の分野からつぎのような指摘がなされている⁽²⁾。

- ① 水深の浅いものが多く、一般的には幅の狭い水道によって外海との自由なつながりを持つ
- ② 河川が海に注ぎ込むところにあるために、陸域からの有機物や栄養塩類の流入によって肥沃である
- ③ 水深が浅いため、水中の生物にとって太陽エネルギーを利用するうえで有利であり、肥沃であることと合わせて生物の生産性が高い
- ④ 湖水は停滞しやすく、自然の沈澱池の役目を果たしている
- ⑤ 潮汐の影響を受けた水の出入りがあり、これによって外海との物質交換が行われる
- ⑥ 生物群集は、汽水域に固有な種に加え、海からあるいは淡水環境からやってきたものたちで構成され、変化に富んだ特徴ある生物相が見られる
- ⑦ 陸域から海域への移行部にあるため、その環境は海と陸との双方の要因によって影響を受け、水理学的には複雑であるとともに生態学的には極めて特色ある場となっている

つまり、汽水湖とは河川から流れ込む淡水が河口付近で洲などの堆積物の発達によって溜まった湖であり、狭い水道によって外海とつながっていることで海水の流入がある。こうした複雑な環境によって、汽水湖には栄養価の高い環境が作り出され、淡水性・海水性双方の変化に富んだ生物相が構成されているのである。

また、こうした汽水湖の環境についての基礎的な指摘を受け、汽水湖で行われる漁業に直接的・間接的に影響を与えると考えられる条件についても言及が見られる。必ずしも同じレベルで並列に扱うことのできるものではないが、後に示す中海の漁業の事例を考察するうえで有効であるのでここで確認しておきたい。

まずは、汽水湖が「生息する生物の量、生物生産量が地球上のあらゆる場所の中でも最も大きい場所」として知られており、それが豊富なプランクトン、とくに植物プランクトンによって支えられているということである。陸域や海域からの栄養物質の流入や水深が浅いことによる太陽エネルギーの

利用しやすさなどが影響しているという。⁽³⁾ときには赤潮やアオコなどの被害をもたらすものではあるが、水中の食物連鎖の基礎となる植物プランクトンが豊富であることは、汽水湖における漁業を根本で支えるものである。

つぎに、中海の位置する日本海沿岸などの干満差の小さな地域では、汽水湖への海水の流入が天文的要因よりも気象的要因によって引き起こされるということである。この気象的要因とは低気圧による海水位の上昇にともなう中海への海水の流入であり、さらに水質や生物の盛衰もまた気象によって左右されるというのである。たとえば水深の浅い汽水域は気温による水温の変化を受けやすい。気温は微生物の活動に影響を与え、さらには水位をも左右する。また、降水は塩分濃度を左右する⁽⁴⁾ほか、汚物や栄養塩の流入を招く。日照は植物プランクトンの光合成を助ける。そして、興味深いのが風である。中海の水はその約2分の1が海水だというが、浅く水の停滞性の高い汽水湖では上層を占める淡水と下層を占める海水は混ざりにくい。さらに、その海水も上層と下層では塩分濃度が異なるため上下の海水同士も混ざりにくく、堆積汚泥の溜まった湖底は、微生物の活動が活発な夏季には有機物の分解によって酸欠状態になる。こうした状況を改善することができるのは、強風による湖水の攪乱以外にないという。

そして最後に、汽水湖が外部からの影響を受けやすく、環境変化が激しいということである。先ほどからあげている川や海からの影響、気象の影響はもちろんのこと、とくに人為的な大規模工事等の自然改変の影響は計り知れない。利根川河口堰の影響によって霞ヶ浦が淡水化したことや、八郎潟のようにその面積のほとんどが干拓されたといった例は汽水湖そのものの破壊であるが、そこまで大規模ではない自然⁽⁵⁾の改変であっても予想をはるかに上まわる大きな影響を被るのが汽水湖の特徴でもあるようである。

中海の漁業と研究上の課題

それではこうした環境下にある中海ではどのような漁業が営まれてきたのであろうか。筆者らが行った聞き取り調査を振り返ってみると、大根島での調査ではアオデガニ刺網漁、ウナギ夜突漁（アオデガニやチヌなども突いた）、ウナギ竹ツボ漁、アカガイやエビの桁曳漁などの漁の話が聞かれ、古くはタコツボ漁や三枚網漁も行われていたという。また、半島部の本庄での調査ではサヨリやヨシエビなどの多様な魚種を狙うマス網漁やアカガイやエビの桁曳漁、ウナギ竹ツボ漁、メバル釣り、釣りエサ用のエビのシバヅケ漁などの話が聞かれた。これはあくまでも非常に短時間での調査の結果であり、中海での漁業が衰退の傾向を示す現在において聞かれる話である。現在よりも生業に占める漁業の位置が相対的に高かった時代にあっては、対象とする魚種、そしてそれを獲る漁法ともに、さらに⁽⁶⁾バリエーションに富んでいたようである。昭和40年代の報告を確認してみたい。

まずは、大根島と江島という中海に浮かぶ二つの島の漁業である。漁法は突漁、釣漁、網漁、桁曳漁、その他の5種類に分類されており、たとえば突漁であればウナギやチヌの夜突き、マテガイのヤスおとし、釣漁はボラの一本釣りや延縄、チヌの船曳釣り、ウナギの穴釣り、タコ釣りなど、網漁はハゼやウナギを狙ったツボ網、サヨリの流網、チヌのタタキ網、カニ網など、桁曳漁はエビゲタやヒガイゲタ、そしてその他の漁としては竹ツボやタコツボなどが紹介されている。



写真 江島の船と集落

一方、万原や下宇部尾、森山といった島根半島部の地域で行われてきた漁法については、森林資源や稲作といった生業に恵まれてきたため、島に比べて「漁業に対する情熱とでもいうべきものが、比較的すくなかった」としながらも、サヨリ・メバル・シラサエビ・カニ・ウナギなどが対象となるマス網やイワシなどが対象となった地曳網（大正～昭和初期）、イワシの刺網、カニの刺網、トビウオを狙う流網、釣漁としてはおもにスズキを対象とする一本釣り、ウナギの穴釣り、そしてウナギを主としてスズキやボラ、チヌなどを狙う突漁、エビを獲るエビゲタ、そしてその他の漁としてはアサリカキやタコツボ、イカカゴなどが紹介されている。

このようにして記録されている魚種と漁法は相当数にのぼる。上記の報告書に記載された漁法と魚種を数えあげてみると、大根島・江島の島部では27漁法で17種の魚介類が獲られており、半島部については25漁法で26種の魚介類が獲られている。その詳細については表にまとめたとおりである。当然のことながら、島および半島の複数の地域における調査結果をまとめたものであるため、単純に一つの地域の漁法と魚種が示されているわけではない。今後の調査で一地域において営まれる漁法と獲得される魚種についての詳細な検討が必要となるが、上記の数字は中海で営まれてきた漁法と獲得されてきた魚種の豊富さを示す意味では活用が可能である。もう少し表の分析を進めてみたい。

大根島・江島で紹介されている漁法27種類の内訳は「突漁」2、「釣漁」9、「網漁」6、「桁曳」3、「その他」7であるのに対して、半島部の漁法25種類の内訳は「突漁」2、「釣漁」2、「網漁」11、「桁曳」1、「その他」9である。ここで注目したいのは「釣漁」と「網漁」である。島部においては

表 島根県教育委員会 1971『出雲中海沿岸地区の民俗——中海沿岸地区民俗資料緊急調査報告——』を参考に筆者作成

島		半島	
漁法	魚種	漁法	魚種
突漁	夜突き	突漁	タコ・ウナギ・スズキ・ボラ・チヌ・クロダイ
	ヤスおとし		ヤス
釣漁	ボラ釣1	釣漁	一本釣
	コギ釣		ウナギの穴釣
	チヌ釣	網漁	マス網
	ウナギの穴釣		四つ手網
	ボラ釣2		船引網
	エイナワ		ヘイヒキ網
	延縄		地曳網
	ブンチン		手繰網
網漁	ツボ網	網漁	ゲンシキ網
	大網		刺網
	ミ網		コノシロ網
	サヨリ網		カニのカケ網
	タタキ網		カマスカケ網
	カニ網		カマス
桁曳	ヒガイゲタ	桁	エビゲタ
	エビゲタ		テングサ突き
	ボウズゲタ		アサリカキ
その他の漁法	竹ボッポ	その他の漁法	タコツボ
	タコツボ		竹ボッポ
	カゴオトシ		カニダモ
	カゴツケ		アゴダモ
	カワラアゲ		ゴンガラ
	イカナゴのタモすくい		バイかご
	サヨリのタモすくい		イカかご

「釣漁」が優勢であるのに対して、半島部では「網漁」が優勢である。⁽¹¹⁾3キロメートル程度の距離で向き合って同じ中海を囲みながらこのような違いが生じるのはなぜか。漁業への依存度の違いや生業への組織的な取り組みの強弱、沿岸域の湖底や潮流といった環境の相違など、島部と半島部とのさまざまな違いがその原因として予想される。

たとえば、報告書において「漁業に対する情熱」の違いと表現されたように、半島部では島部に比して広い後背地を生業活動に活用してきたため、相対的に漁業への依存度が低いという。こうした農業などの他生業との兼業のなかで行われる漁業が、地主小作関係などの社会組織を背景として、地域の有力者を網元とした共同作業を基本とする網漁となる傾向にあることは、海における漁と共通するものであろうか。あるいは、湖底の環境も大きな影響を与えていると考えられる。半島部において営まれてきた網漁には、船曳網や地曳網などの湖底が平坦であることが条件となる網漁が多い。また、潮の流れや風浪の少ないところに杭を打って設置される「マス網」も、潮流や水深といった環境が整っていなければならない。島部、半島部それぞれの地域が利用することができた湖面、すなわち漁業権の問題やその湖底環境についての詳細な検討も必要となるであろう。

一方、こうした漁場としての中海の環境は常に変化を繰り返してきたようである。左でも汽水湖の特徴としてあげられていたように、汽水湖は自然的・人為的な環境変化の影響を受けやすい性質を持っている。中海では大正9年から2.9キロメートルにおよぶ境港の砂防堤工事が行われ、戦後は淡水化干拓事業のために昭和47年には中浦水門が、昭和53年には大海崎・森山堤防が構築された。境港

の砂防堤では水質の大幅な悪化を招き、水門と堤防の構築では、日本海と中海とを結ぶ流れが、大根島⁽¹²⁾の西をまわる流れから東をまわる流れへと変化したという。平成14年には干拓事業の中止が決定し平成21年には中浦水門が撤去されたが、実際に漁にたずさわってきた人の「昔は時計まわりに潮が流れていたが、今はめちゃくちゃ」という言葉は、干拓事業の影響が現在まで続いていることを示している。

こうした大規模で人為的な環境改変の影響はもちろんのことであるが、自然による環境の変化でさえも中海での漁業には大きく影響するという。「中海の漁業を外海漁業に比較していえることは、外海が年間を通じてある定まった漁獲内容を持ち、しかも長期にわたって漁業を続け得られるのに対して、中海の漁業はあまりにも連続性に乏しく、たえず漁獲内容が変転するということである。すなわち、これまでに獲れていた魚が獲れなくなり、漁師はやむなく他の漁獲物に転ずるということ、したがって漁場といい、漁法においても自然と外界のそれに比して、すべてが弱小であった⁽¹³⁾」という。であるならば、常に変化を繰り返す中海の環境が、そこで行われる漁業や漁業を含みこんだ生活にどのような影響を与えてきたのかが問われる必要があるだろう。聞き取り調査では、大根島では一人がさまざまな漁に従事するという話が聞かれたが、環境の絶えざる変転が漁業の規模や漁法の選択的複合などに与える影響についてはとくに注意する必要がある。

おわりに

以上、ごくわずかな調査成果を先行研究によって補ったため、不十分な内容の報告に終始してしまっただが、今後、汽水湖における漁業とそれを含み込んだ生活について、汽水湖という環境の特性をふまえながら研究していくための指針については示し得たと考える。

中海で営まれてきた漁法とその背景に横たわる環境との関係について生態学や水産学の成果を乗り越えることは容易ではない。しかし、中海での漁業にたずさわる人びとが、汽水湖という環境に対してどのような知識を持っており、またその知識にもとづいたどのような技能・技術を用いて漁業を行っているのか、また、こうした漁業を生業の一つに組み込みながらどのような複合的生業のもとで生活してきたのか、こうした観点から汽水湖である中海沿岸地域の生活を描くという作業は民俗学の果たすべき役割であろう。

上で紹介した漁法の一つひとつが、汽水湖という環境をどのように利用しながら行われてきたのか、また複数の漁法やその他の生業がどのように結び付いて生計を維持し得てきたのか、一人の漁業従事者の漁業暦とその時代的变化をふまえたうえでの漁法の選択的な複合の様相、そして漁業とその他の生業の複合の様相に着目しながら、汽水湖という環境のなかで営まれてきた生活を調査にもとづいて総合的に把握することが今後の課題である。

注

- (1) 内水面漁業に関する本格的な調査の経験はないが、以前、奈良県吉野山中で行った調査でも同様の傾向が確認されたことが思い出される。あくまでも漁業を収入源とはしない地域での事例ではあるが、ウグイを獲るのに餌釣り、引搔け釣り、ジンドウ（木製の筌）、投網、刺網（ネコやムササビで追い込む）、タモ網な

- どの漁法が行われてきたという（元興寺文化財研究所編 2007『川上村白屋地区文化財民俗調査報告書』国土交通省近畿地方整備局紀の川ダム統合管理事務所・元興寺文化財研究所 pp. 438-440）。
- (2) 大竹久夫 1982「汽水域の生態学」（島根大学地域分析研究会『飫宇の入海——中海とその干拓淡水化をめぐる——』たたら書房 pp. 87-94）
- (3) 國井秀伸ほか 1993「汽水湖生態系の特性と日本における研究の現状」（『日本生態学会誌』43、日本生態学会 p. 203）
- (4) 6月から7月の梅雨時にはヨシエビが宍道湖から中海へと移動してくるという。これは、降水によって宍道湖の塩分濃度が下がるため、ヨシエビがより塩分濃度の高い中海を目指すためだという。中海ではこうして移動してくるヨシエビをマス網で捕獲するという。
- (5) 四万十川河口域の調査においても、600メートルにわたって築かれた防波堤の影響で水の流れに変化が生じ、塩分濃度が極度に高まって生物相が大きく変化したという話が聞かれた。
- (6) 島根県教育委員会 1971『出雲中海沿岸地区の民俗——中海沿岸地区民俗資料緊急調査報告——』pp. 49-66
- (7) 「エビ」および「貝」は記述が曖昧なため数えなかった。また、「チヌ」と「クロダイ」も重複の可能性があるので数えなかった。魚種の記載が無い大網では多様な魚種が獲得されることが考えられる。
- (8) 「エビ」は記述が曖昧なため数えなかった。「アゴ」は「トビウオ」との重複の可能性があるので数えなかった。
- (9) 島においては2島で6地域、半島においては3地域で調査が行われており、地域ごとの漁法の違いについてはかならずしも明確には示されていない。
- (10) また、ここで挙げられている漁法が行われていた時代についてもかならずしも明確に示されているわけではなく、すでに禁止された「ミアミ」や大正から昭和初期にかけて盛んであったという「地引網」などの記載もある。同時代に営まれた漁法という観点からも注意が必要である。
- (11) 半島部の漁業で漁獲される魚種が豊富である理由は網漁への依存度の高さに由来すると考えられる。釣漁に比べて網漁の漁獲対象魚種は広い。たとえば、マス網で漁獲される魚種だけでも12種類が報告されている。
- (12) 注(3) 同書 p. 202
- (13) 注(6) 同書 p. 57